

### 文部省方式の致命的欠陥(1)

「あるけ」式学習方式では、先生が、どんなに口をすっぱくして、「漢字を使って書きなさい」と注意しても、子どもには、漢字を使って書こうという習慣はつきません。

わたしが先ほど、「あるけ」式学習方式には、致命的な欠陥がある、といったのは、これなのです。いままで、どこの学校の、どの先生でも、

「子どもたちは、知っている漢字を使わない」と嘆いています。その理由は、漢字の字形が複雑だからだ、と思っています。ですから、これはどうにもならない、いわば宿命的なもの、というふうにあきらめてしまっています。

わたしも、「歩け」式と「あるけ」式と、この二つの方式をやってみるまでは、やはりそう思っていました。けれども、「歩け」式をやり、そのうえ、「あるけ」式をやってみて、その結果があまりにもちがうので、ほんとうの理由がわかったのです。

### 文部省方式の致命的欠陥(2)

わたしの指導主事時代、先生がたから相談を受けた問題に、もう一

つ、

「『火と(人)が木(来)ました』というような書き方をする子どもがひじょうに多いが、これをどのように導いたらよいのか」

という問題があります。これも、どこの学校の、どの先生もが嘆いている問題です。

この誤りの起こる理由は、「漢字を、ことばとして理解しないためである」と、一般に考えられています。ですから、「火」は、単なる「ひ」という音を表わすものではない。「燃えるひ」を表わす字であって、「朝白」というばあいには使えない字である、ということをよく理解させればよい……。

このように考えられていました。指導主事時代のわたしは、いつもそのように答えておりました。

しかし、問題は、そんなにかんたんなものではなかったのです。教師の、そういう注意だけで、子どもたちは、正しい漢字の使い方ができるようになるものではないのです。

これもやっぱり、根本的には、「あるけ」方式の生み出した欠陥だったのです。「歩け」方式のときには、なんの注意を与えないでも、こんな誤った使い方をする子どもは、全然ありませんでした。ところが「あるけ」方式では、「火は燃えるひで、それ以外には使えない字ですよ」

と、どんなにていねいに教えても、一、二割の子どもが、まちがった使い方をするので、